

百物語

岡本綺堂

青空文庫

今から八十年ほどの昔——と言いかけて、〇君は自分でも笑い出した。いや、もつと遠い昔になるのかも知れない。なんでも弘化元年とか二年とかの九月、上州じょうしゅうの或る大名の城内に起つた出来事である。

秋の夜に若侍どもが夜詰めよづめをしていた。きのうからの雨のふりやまないので、物すごい夜であつた。いつの世もおなじことで、こういう夜には怪談のはじまるのが習いである。そのなかで、一座の先輩と仰がれている中原武太夫という男が言い出した。

「むかしから世に化け物があるといい、無いという。その議論まちまちで確かに判らない。今夜のような晩は丁度あつらえ向きであるから、これからかの百物語というのを催して、妖怪が出るか出ないか試してみようではないか。」

「それは面白いことでござる。」

いずれも血気の若侍ばかりであるから、一座の意見すぐに一致して、いよいよ百物語をはじめることになった。まず青い紙で行燈あんどうの口をおおい、定め通りに燈心百すじを入れて五間いつまほど距はなれている奥の書院に据えた。そのそばには一面の鏡を置いて、燈心をひと

筋ずつ消しにゆくたびに、必ずその鏡のおもてを覗いてみるということという約束であつた。勿論、そのあいだの五間^{いつま}にはともしびを置かないで、途中はすべて暗がりのなかを探り足でゆくことになつていた。

「一体、百ものがりという以上、百人が代るがわるに話さなければならないのか。」

それについても種々の議論が出たが、百物語というのは一種の形式で、かならず百人にかぎつたことではあるまいという意見が多かつた。実際そこには百人のあたま数^{かず}が揃つていなかった。しかし物語の数だけは百箇条を揃えなければならないといふので、くじ引きの上で一人が三つ四つの話を受持つことになつた。それでもなるべくは人数が多い方がいいといふので、いやがる茶坊主どもまでを狩りあつめて来て、夜の五つ（午後八時）頃から第一番の浦辺四郎七という若侍が、まず怪談の口を切つた。

なにしろ百箇条の話をするのであるから、一つの話はなるべく短いのを選ぶという約束であつたが、それでも案外に時が移つて、かの中原武太夫が第八十三番の座に直つたのは、その夜ももう八つ（午前二時）に近い頃であつた。中原は今度で三番目であるから、持ちあわせの怪談も種切れになつてしまつて、ある山寺の尼僧と小姓とが密通して、ふたりとも鬼になつたとかいう紋切形^{もんきりがた}の怪談を短く話して、奥の行燈の火を消しに行った。

前にもいう通り、行燈のある書院までゆき着くには、暗い広い座敷を五間通りぬけなければならぬのであるが、中原は最初から二度も通っているのも、暗いなかでも大抵の見当は付いていた。彼は平気で座を起つて、次の間の襖をあけた。暗い座敷を次から次へと真つ直ぐに通つて、行燈の据えてある書院にゆき着いたときに、ふと見かえると、今通つて来たうしろの座敷の右の壁に何やら白いものが懸かっているようにぼんやりと見えた。引つ返してよく見ると、ひとりの白い女が首でも縊くつたように天井から垂れ下がっているのであつた。

「なるほど、昔から言い伝えることに嘘はない。これこそ化け物というのであらう。」と中原は思った。

しかし彼は気丈の男であるので、そのままにして次の間へはいつて、例のごとくに燈心をひとすじ消した。それから鏡をとつて透かしてみたが、鏡のおもてには別に怪しい影も映らなかつた。帰るときに再び見かえると、壁のきわにはやはり白いものの影がみえた。

中原は無事にもとの席へ戻つたが、自分の見たことを誰にも言わなかつた。第八十四番には^{かけい}寢甚五右衛門というのが起つて行つた。つづいて順々に席を起つたが、どの人もかの怪しいものについて一言もいわないので、中原は内心不思議に思った。さてはかの妖怪は

自分ひとりの眼にみえたのか、それとも他の人々も自分とおなじように黙っているのかと
思案しているうちに、百番の物語はとどこおりなく終った。百すじの燈心はみな消されて、
その座敷も真の闇となった。

中原は試みに一座のものに訊いた。

「これで百物語も済んだのであるが、おのおのうちに誰も不思議をみた者はござらぬか
」

人々は息をのんで黙っていると、その中での寘甚五右衛門がひと膝すすみ出て答えた。
「実は人々をおどろかすも如何^{いか}と存じて、先刻から差控えておりましたが、拙者は八十四
番目のときに怪しいものを見ました。」

ひとりがこう言つて口を切ると、実は自分も見たという者が続々あらわれた。だんだん
詮議すると、第七十五番の本郷弥次郎という男から始まって、その後の人は皆それを見た
のであるが、迂濶に口外して臆病者と笑われるのは残念であると、誰も彼も素知らぬ顔を
していたのであつた。

「では、これからその正体を見届けようではないか。」

中原が行燈をともして先に立つと、他の人々も一度につづいて行つた。今までは薄暗い

のでよく判らなかつたが、行燈の灯に照らしてみると、それは年のころ十八九の美しい女で、白無垢のうえに白縮緬のしごきを締め、長い髪をふりみだして首をくくつていゝのであつた。こうして大勢に取りまかれていても、そのまま姿を変えないのを見ると、これは妖怪ではあるまいという説もあつたが、多数の者はまだそれを疑つていた。ともかくも夜のあけるまではこうして置くがよいというので、あとさきの襖を嚴重にしめ切つて、人々はその前に張番をしていると、白い女はやはりそのままに垂れ下がつていた。そのうちに秋の夜もだんだんに白^{しろ}んで来たが、白い女の姿は消えもしなかつた。

「これはいよいよ不思議だ。」と、人々は顔を見あわせた。

「いや、不思議ではない。これはほんとうの人間だ。」と、中原が言い出した。

初めから妖怪ではあるまいと主張していた連中は、それ見たことかと笑い出した。しかしそれがいよいよ人間であると決まれば、打捨てては置かれまいと、人々も今更のように騒ぎ出して、とりあえず奥掛りの役人に報告すると、役人もおどろいて駈け付けた。

「や、これは島川どのだ。」

島川というのは、奥勤めの中老で、折りふしは殿のお夜伽^{よとぎ}にも召されるとかいう噂のある女であるから、人々は又おどろいた。役人も一旦は顔色を変えたが、よく考えてみると、

奥勤めの女がこんなところへ出てくる筈がない。なにかの子細があつて自殺したとしても、こんな場所を選ぶ筈がない。第一、奥と表との隔てのきびしい城内で、中老ともあるべきものが何処をどう抜け出して来たのであらう。どうしてもこれは本当の島川ではない。他人の空似か、あるいはやはり妖怪の仕業か、いずれにしても粗忽に立ち騒ぐこと無用と、役人は人々を堅く戒めて置いて、さらにその次第を奥家老に報告した。

奥家老下田治兵衛もそれを聴いて眉をしわめた。ともかくも奥へ行つて、島川どのに目にかかりたいと言ひ入れると、ゆうべから不快で臥せているからお逢ひは出来ないという返事であつた。さては怪しいと思つたので、下田は押返して言つた。

「御不快中、はなはだお氣の毒でござるが、是非ともすぐにお目にかからねばならぬ急用が^{しゅったい}出^い来^きいたしたれば、ちよつとお逢ひ申したい。」

それでどうするかと思つて待ち構えていると、本人の島川は自分の部屋から出て来た。なるほど不快のていで顔や形もひどく^{やつ}寔^しれていたが、なにしろ別条なく生きているので、下田もまず安心した。なんの御用と不思議そうな顔をしている島川に対しては、いい加減の返事をして置いて、下田は早々に表に出てゆくと、かの白い女のすがたは消えてしまつたというのである。中原をはじめ、他の人々も嚴重に見張つていたのである、それがおの

ずと煙りのように消え失せてしまったというので、下田も又おどろいた。

「島川どのは確かに無事。してみると、それはやはり妖怪であつたに相違ない。かようなことは決して口外しては相成りませぬぞ。」

初めは妖怪であると思つた女が、中ごろには人間になつて、さらにまた妖怪になつたので、人々も夢のような心持であつた。しかしその姿が消えるのを、もくぜん目前に見たのであるから、誰もそれを争う余地はなかつた。百物語のおかげで、世には妖怪のあることが確かめられたのであつた。

その本人の島川は一旦 ほんぷく本復して、相変らず奥に勤めていたが、それからふた月ほどの後に再び不快と言ひ立てて引籠つているうちに、ある夜自分の部屋で首をくくつて死んだ。前々からの不快というのも、なにか人を怨むすじがあつた為であると伝えられた。

してみると、さきの夜の白い女は単に一種の妖怪に過ぎないのか。あるいはその当時から島川はすでに縊死の覚悟をしていたので、その いきりよう生霊が一種のまぼろしとなつて現われたのか。それはいつまでも解かれぬ謎である、中原武太夫が老後に人に語つた。これも前の話の離魂病のたぐいかも知れない。

青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

百物語

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>